

自由間接話法に関する考察

—語り手の視点を中心に—

紋谷 清実

1. はじめに

次の英文は、「東大第5問演習」と題した夏季補習で用いた、2011年東大入試問題第5問の長文の冒頭である。

One morning there was a knock on the front door. The knocking continued, and someone called out: 'Anyone there?' It was Mrs. Brodie, a neighbor who lived next a few houses away. She first saw the unfortunate child whose name she could never remember. Then she saw her mother, and put her hand over her mouth: 'Oh, my goodness!' She arranged an ambulance to take her to hospital. (太字下線は筆者)

これを読んで、24名の受講生徒に英文中の someone は誰かと質問した。ほぼ全員が Mrs. Brodie と答えた。次に、ドアをノックしているのは誰か質問した。大半の生徒が Mrs. Brodie と答えた。そうすると生徒の多くは 'Anyone there?' というセリフを「(家の中に)誰かいますか」と読んだことになる。筆者はこの英文を読み、'Anyone there?' は Mrs. Brodie が家の中から「(外に)誰かいるの」と声をかけたものと捉えた。ここで生徒と議論になったが、筆者の主張はなかなか分かってもらえないようだった。定評のある入試問題解説書にも「ノックしている人物が叫んだ発言」(竹岡 2020, 625), 「ドアをノックする人が言いそうなセリフ」(駿台予備学校 2020, 224)とあるので、生徒の読みが正しいだろうが、ここで言いたいのは、登場人物の立ち位置をどう見るかで、見えてくるシーンが全く違ってくるということである。本稿では語り手の視点の置き方を話法に絞り考察する。

2. 話法と語り手

高等学校の英語の授業では、話法に関し直接話法

と間接話法は扱われるが、自由間接話法(描出話法とも呼ばれるが、本稿では Quirk et al. (1985)で用いられている free indirect speech の訳語を用いる)はほとんど扱われないのが実情である。また、直接話法と間接話法を扱ったとしても、その形態的特徴や話法間の転換が主で、ことによると2つの話法は等価な意味を伝えるものと生徒が誤解することが懸念される。例えば、久野・高見では、次のような例文を用いて2つの話法は機械的な書き換えでは決して等価にならないことを示している。

(1) a. Mary says, "John, who is honest, never tells lies."

この文を間接話法に書き換えた場合、次の文は正解にならない。

(1) b. Mary says that John, who is honest, never tells lies.

なぜなら、(1) a では「ジョンが正直である」と思っているのが、メアリーなのに対し、(1) b ではそう思っているのがメアリーではなく、この文の話し手であるからである。(久野・高見 2005, 191)(番号・下線は筆者)

また、福地でも、次のような指摘がある。

(2) John said that he had seen the woman who lives at 219 Main Street.

この文には2つの解釈がある。① John said, "I saw the woman who lives at 219 Main Street." をそのまま伝えたものと、② John said, "I saw Mary Smith." のように言った場合で、この場合話者は Mary Smith という人物が誰か分かっており、聞き手の便宜を考え、the woman who lives at 219 Main Street と言い直して伝えたものと考えられる。後者の解釈では、言わば話者が主節主語の言った内容に干渉していることになる。(福地 1985, 191)(番号・下線は筆者)

以上のように、間接話法では語り手の存在を意識しなければならないことがわかる。同様に自由間接話法も、単に直接話法と間接話法の mixed speech ではないことがうかがえる。以下では自由間接話法を語り手の視点から考えてみたい。

3. 自由間接話法の語り手の視点

まず、自由間接話法の形態的特徴を確認しておく。

- (i) 時制と人称は間接話法と同じ
- (ii) 時制と人称以外のダイクシスは直接話法と同じ
- (iii) 疑問文・命令文・感嘆文などの文構造は直接話法と同じ
- (iv) 伝達節はない

以上の形態的特徴を視点の置き方から見ると、

- (i) 時制と人称は語り手の視点
- (ii) 時制と人称以外のダイクシスは登場人物の視点というふうに言い換えられる。すなわち自由間接話法の視点は複眼ということになる。そしてこのことが自由間接話法の特異性と密接に関係していると思われる。つまり、この話法によって読者は小説の語り手の地の文(語り手の視点)から遊離することなく、登場人物の視点に自らを重ねられるのである。

橘高では、FIS(自由間接話法)を「二重の声」(narrator's voice/character's voice)と分析し、「FISが単にDSとISの中間に位置する話法ではなく、直前のコンテキストからの推論をもとに読者が二重の声の両方あるいは主に片方を聞き取ることの出来る、他の話法とは違った異質な話法である」としている。(橘高 2017, 77)

この「主に片方を聞き取ることの出来る」という点はとても興味深い考察である。冒頭で引用した2011年の東大長文の後半部分では、ことばを話すのが困難な少女が医師の問診に応じる場面で、次のような自由間接話法が出てくる。

Yes, the problem started about two years ago, after she had witnessed her father's death. Yes, it was getting worse, she spoke less and less. Yes, there were occasions when she spoke without difficulty; she could recite whole verses of Shakespeare, which she had learned from her mother.

この部分の訳として生徒に次の①、②の2つの訳例

を示して、どちらの訳がよいか尋ねてみた。

①「はい、症状は2年くらい前に始まりました。父の死を目にしてからです。はい、悪化しています。ますます話さなくなっています。はい、苦勞しないで話せるときもあります。私、シェークスピアの文章をいくつか丸ごと暗唱できるんです。母から習いました。」

②「そうです、症状は2年前に、彼女が父の死を目にしてから、始まりました。そうです、悪化しました。彼女はますます話さなくなりました。そうです、彼女には苦勞しないで話せるときもありました。彼女はシェークスピアの文章をいくつか丸ごと暗唱できました。それは母から習ったものでした。」

生徒は圧倒的に①の訳を支持した。なぜ日本人は「二重の声」のうちから、登場人物の声を聞き取るのだろうか。逆に、なぜ英語の母語話者は、過去時制で3人称のこうした文を違和感なく読めるのか疑問が残る。筆者が知らないだけで、こうした疑問にはすでに示唆に富んだ考察があるのかもしれないが、日本語話者と英語話者には、文の認知に関して違いがあることは確かである。

神尾(1990)では、英語と日本語において、心理文(人の心理状態を表す文)の許容度に差があることを指摘し、次のような例文を挙げている。(番号は筆者)

- (3) a. I'm sick.
- b. (??) You are very depressed.
- c. (??) Jack feels lonely.

-
- (4) a 僕は気分が悪い。
 - b* あなた、なんだか怒っている。
 - b' あなた、なんだか怒っているみたいね。
 - c* 母はさびしい。
 - c' 母はさびしそうだ。

日英語とも1人称の主語の心理文はきわめて自然であるが、2・3人称主語の場合英語では限られた条件のみ自然である。つまり、文が表す情報が話し手にとって〈近〉情報である場合に限られる。一方日本語では英語と異なり、身近な人物の心理状態を通常の直接形で表現することは一般に不可能で、(4) b' や c' の様な間接形を用いなければならないとしている。神尾の心理文での指摘が、小説の心理描写の場面ではしばしば用いられる自由間接話法にも当て

はまり、日本語話者は2・3人称で他人の内面を表現するのを不自然に思うのかもしれない。別の言い方をすれば、自由間接話法に対して、英語話者は間接話法より心的近接性を感じ取り、日本語話者は直接話法より心的遠隔性を感じ取ってしまうのかもしれない。いずれにせよ、自由間接話法の日本語訳では登場人物の声に耳を傾けたほうがより自然な訳になりそうである。

また、2008年の東大の長文では、前半と後半で語り手の視点が変化するのが面白い。前半では母親に視点を重ねて愛おしい娘を見つめ、後半では思春期の娘に視点を重ねて、母親に反発の視線を投げかける。この長文の最後に出てくる文“Look at what she had been getting away with for a year now.”は下線部訳の問題にもなっているが、自由間接話法であることが見抜けないと不自然な訳文になる可能性がある。英語母語話者がどうやって地の文と自由間接話法の文を見分けているのかも興味深い点ではある(この点では安藤(2005)が参考になる)。

4. おわりに

小説やエッセイが教材として取り上げられる頻度は以前より少なくなってきており、同時に英語教員が自由間接話法に言及する機会も少なくなっていると思われる。その点で、東大の長文では自由間接話法がよく登場し設問にもなっているの、生徒と自由間接話法について議論するにはよい題材になるのではないかと思い投稿してみた。今後自由間接話法への関心がさらに高まることを願っている。

参考文献

- 安藤貞雄(2005). 『現代英文法講義』. 開拓社.
 神尾昭雄(1990). 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』. 大修館書店.
 橘高眞一郎(2017). 『英語文学作品における自由間接話法の心的処理』. 佛教大学文学部論集, 第101号.
 久野暉・高見健一(2005). 『謎解きの英文法 文の意味』. くろしお出版.
 福地肇(1985). 『新英文法選書 10 談話の構造』. 大修館書店.
 Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
 竹岡広信編(2020). 『東大の英語 27 年 [第 10 版]』.

教学社.
 駿台予備学校編(2020). 『東大入試詳解 25 年第 2 版』.
 駿台文庫.

(群馬県立高崎高等学校 英語科非常勤講師)